

原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ
復興対策基礎基盤研究プログラム
事後評価総合所見

評価の概要		
研究課題名：原子力発電所事故時の放出量および再飛散量推定手法高度化に関する研究 研究代表者（研究機関名）：加藤 信介(東京大学) 再委託先研究責任者（研究機関名）：坂田 展康（三菱重工業株式会社） 研究期間及び研究経費：平成24年度～平成26年度（3年計画）86百万円		
項 目	要 約	
1. 研究の概要	暫定放出量を数時間後、詳細値を数日後に推定可能とすることを目標に、時空間の4次元移動観測データを被ばく予測計算結果と自動的に比較、補正するシステムである放出量推定手法を開発した。また、福島第一原子力発電所事故では、広域に放射性物質が沈着したため、比較的線量が低い地域に留まって生活する住民等に対して、吸入による長期的な内部被ばく評価手法を構築した。	
2. 総合評価	B	実用段階に近いところまで開発されており、更なる検証と、十分な精度を確保した上での使いやすさの向上を期待するが、実際に使用するためにどのように使うのかを明確にする必要がある。データ入手の制約条件や予測精度など、他の方法とも比較した上で、本手法の有用性を示さなければならない。 S) 極めて優れた成果が挙げられている A) 優れた成果が挙げられている B) 一部を除き、相応の成果が挙げられている C) 部分的な成果に留まっている D) 成果がほとんど挙げられていない